

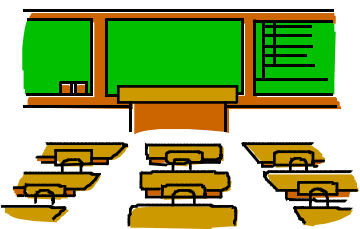
# 『教科担任制』から始まった

教務主任  
物語

「数年前のある日、校長先生が  
「来年、教科担任制で教育課程を編成できないかなあ」とつぶやいた。  
当時、学級崩壊が何かと話題になっていた学校現場であり、  
本校もご多分に漏れず心配なクラスがあった。しかし、小学校は学級  
担任が一人でそれを抱えてしまう傾向があり、なかなか解決策を見い  
出せないでいた。」

「学級王国をなくしたい・・・」  
「みんな子どもたちを見てやれないものが・・・」

私は、校長先生の思いに何とか応えるために、校長先生のつぶやきに私なりの理由を添えて、教科担任制を具体的なものにできないかと考えていた。



数日後、  
「校長先生、教科担任制の原案を考えてみました！」  
校長先生が、丁寧に通して下さり、  
「よし、これはいいじゃないか。実現できそうだね！」  
そのことがきっかけで、翌年、私は教務主任に任命された。  
持ち時間が多い小学校で、ほぼ全教科にわたる教科担任制を  
実現することは大変であったが、学校の教職員全員で児童を指  
導したいという校長先生の思いを実現させたいとの一心で頑張  
った。

「ちゃんが、算数の時間とても積極的だったよ」  
「ちゃんは、理科の実験で班をリードしていたよ」  
子どもたちのいろいろな情報が先生方で共有され、相談し合ったり、お互いに指導し合ったりする姿が日常的に見られるようになってきた。そんな先生方の様子を校長先生はほほえましく眺めていた。

その後、ことあるごとに校長先生に意見を求められ、自分の考えを話すと、  
「明日までにその原案を考えてみてくれ。とにかく大まかでいいから明日までに・・・」  
その日は、夜遅くまでかかって原案を作成した。

すると翌日校長先生から、  
「いいじゃないか、これでやってみよう」  
返された原案には、朱書きでたくさんの方の指導が書き込まれていた。校長先生はいつでも、考えや意見をまず認めてくれて、それを生かすように必ず指導を加えて、より良いものにしてくれた。

校長先生からは「人を育てて生かしていく術」を学んだ。  
今、教務主任として若い先生を指導したり、学年や担任への助言をしたりするときにこの経験を生かせるように心掛けている。

